リアルとオンラインで新しい経済圏をつくる仮想の実験都市「シェア街」

見学隊の下に、リアルとオンラインを組み合わせた「シェア街」と呼ばれる街が存在するという気になる情報が届きました。新しい住まい方の掘り起こしを行う彼らとしては、これを確かめに行かないわけにはいきません。
そこで今回は、「シェア街」を運営する（株）Little Japan 代表取締役の柚木理雄さんに、その実態を伺いました。

【柚木　理雄さん】
株式会社 Little Japan 代表取締役
2008 年　京都大学大学院を卒業後、農林水産省に入省
2012 年　NPO 法人　芸術家の村を設立
2017 年　農林水産省を退職し、株式会社 Little Japan を起業
2019 年　中央大学の特任准教授に就任
2023 年　iU 専門職大学の客員教授に就任

■日本の「嫌い」を「好き」にするために

―本日はよろしくお願いします。（株）Little Japan を起業する前は、国家公務員として働かれていたようですね。

起業前は、農林水産省に９年間勤めていて、国際交渉、経理、金融、農地、官民ファンド、6 次産業化、バイオマスなどに携わりました。
農林水産省に入ったきっかけは、日本という国が嫌いだったからです。

―びっくりする言葉が出てきました（笑）。詳しく教えていただけますか。

小学校３年生になるまでブラジルに住んでいました。
ブラジルの教育は、各々が持つ個性を尊重しようというものであり、伸び伸びと自分がしたいことにチャレンジできる環境がそこにはありました。
そのため、帰国後に受けた日本の画一的教育に対して息苦しさを感じてしまい、気づいたら日本のことが嫌いになっていたんです。

大学院時代には、日本をとにかく出たいと思い、フランスへ留学等もしました。けれども、外から日本を見たときに、日本の治安、伝統文化等、多くの魅力に気づき、日本の嫌だと思ったところも、そこから逃げるのではなく、自分で変えていきたい。そんな想いが芽生えるようになりました。
それができるのはどこかと考えたときに、国で働くのが一番良いのではないかと考え、国家公務員としての道を選びました。

―そういうことだったんですね。それでは、退職して起業に至ったのはどうしてでしょうか。

国という組織で実際に働く中で、国やプラットフォームとなる場所には多くの人が集まり構想を描き続ける一方、実際に現場でその構想を実現するプレイヤーの数が非常に少ないことに気づいたんです。
国を変えるために自分はどこにいるべきか改めて考えたときに、今の立場よりも全体的に不足しているプレイヤーとしての立場でいる方が、世の中を変えることができると考えたので、国家公務員を退職し、（株）Little Japan を起業しました。

■リアル×オンラインで無限に広がるコミュニティ

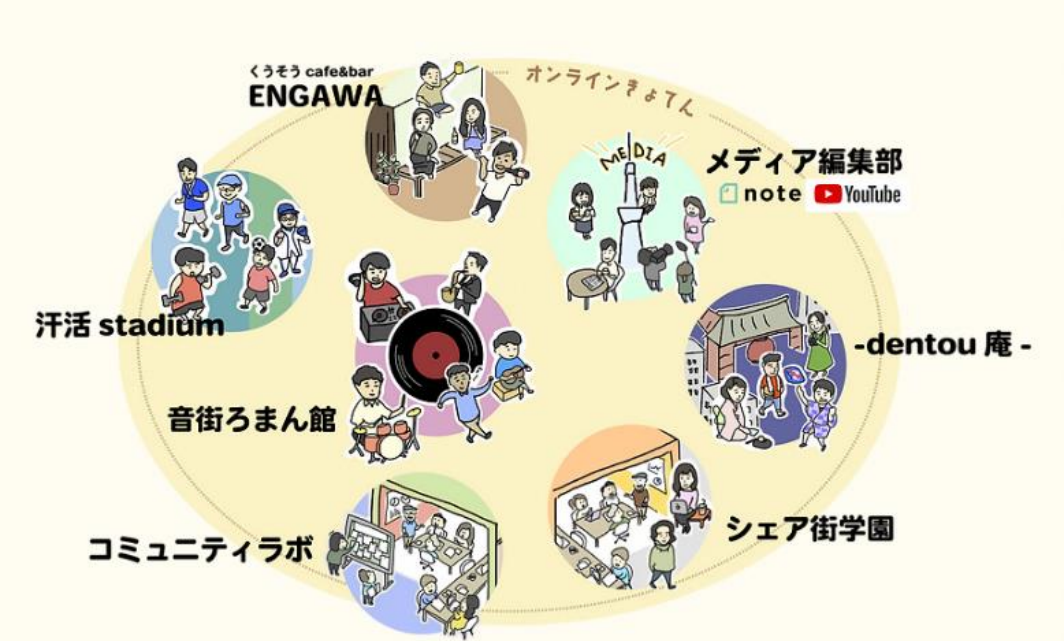
―シェア街の概要を教えてください。

シェア街とは何か理解してもらうために、まず「きょてん」という仕組みについて説明したいと思います。
シェア街には、リアルとオンラインに「きょてん」と呼ばれる様々な機能を持った場所が存在しています。

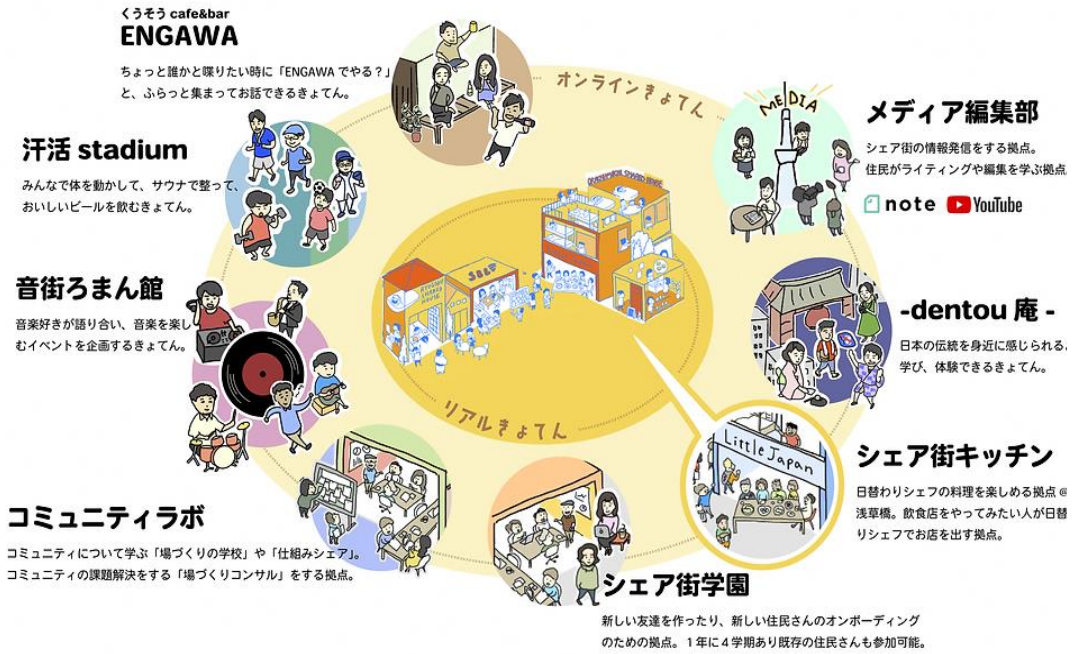
リアルの「きょてん」は、浅草橋周辺に５か所、越後湯沢に１か所あります。浅草橋には複数のシェアハウスがありますが、それぞれの場所が近いこともあって、住民さん同士の交流会等も行われたりもしています。

オンラインの「きょてん」は、主にSlackというアプリのチャンネル機能を活用しています。コミュニティづくりの研究を行うコミュニティラボ、音楽好きが集まって音楽を楽しむイベントを企画する音街ろまん館、シェア街の情報を発信するメディア編集部など、その機能は様々です。

また、住民さん自身が新しい「きょてん」を作ることもできるようになっていて、日々新しい「きょてん」が生まれています。



シェア街では、リアルのシェア街に住んでいる方を「住民」、オンラインのシェア街に住んでいる方を「関係住民」と呼んでいます。
この住民・関係住民どうしのつながるコミュニティ全体がシェア街です。



―自分の好きな「きょてん」を作れるというのは、リアルまちづくりゲームみたいでワクワクしますね。柚木さんも参加はされていますか。

参加しています。例えば、汗活 stadium という毎週木曜日に隅田川を走るメンバーが集まる「きょてん」があるのですが、そこに参加して一緒にランニングをしたりしていました。ただ、寒くなってからはやめてしまいましたが（笑）
他にも、シェア街ではリアルとオンラインのイベントが日々開催されていますが、自分が面白そうだなと思ったところには、積極的に顔を出すことにしています。
自分がやりたいと思ったことに全力で挑戦したり、好きなことをみんなでシェアすることができるのがシェア街の魅力だと思います。

―シェア街には「きょてん」の他にも特徴的な仕組みがあるみたいですね。

シェア街では、「きょてん」の他に、「つうか」、「しごと」という仕組みがあります。
映像をつくったり、記事を書いたり、「きょてん」を運営したり、新しく作ったりするなどの「しごと」をすると、アプリを通じてシェア街で利用できる「つうか」をもらうことができ、シェア街にある様々な「きょてん」での買い物やシェアハウスの家賃などに利用することができます。

―「きょてん」、「つうか」、「しごと」…本当に１つの街がそこにあるみたいですね！

■シェア街の始まり

―シェア街を立ち上げたきっかけを教えてください。

オンラインを組み合わせた形にしたきっかけはコロナですね。
実は元々、この周辺で物件を４つか５つ借りて、リアルだけでのシェア街を始めようとは思っていたんです。
それが丁度、コロナが流行し、リアルのコミュニティが下火になってしまったので、オンラインを活用した今の形となりました。

■シェア街の住民と暮らし

―シェア街にはどんな方が暮らしているのでしょうか。

シェア街には全国から様々な方が暮らしていますが、一番多いのは 20 代後半から 30 代前半くらいの方ですね。
それと、意外かもしれませんが、最初は１人で参加される方が多いです。

―たしかにそれは意外ですね。知り合いがいないコミュニティに 1 人で参加するのは中々勇気が必要だと思ってしまいます。

実は、そういったハードルを下げるために、「シェア街学園」という制度があります。
学園では、1 クラス４、５人くらいのクラスに分かれ、自己紹介等を通して仲良くなることを最初の目標としています。そしてお互いのことを知ることができたら、シェア街で行っているリアルイベントやオンラインイベントに参加してみて、シェア街の楽しみ方を知ってもらうみたいなことをやっています。

―どんな方にシェア街の住民になってもらいたいと考えていますか。

色々考えられますが、たとえば交流が好きな方ですね。

僕は、どんな人に住んでもらいたいかとか、どんな人に利用してもらいたいかがコミュニティをつくるうえで一番大事なことだと思っています。誰でも楽しめる、みんなにとって良い場所というのは作るのが難しくて、そこを分けて考えないと、必ず嫌な思いをする人がいると思っています。

どんな人にこの場所に来てもらいたいか、逆に自分たちには来てもらいたくない人が、自分たちの場所を見つけたときに、自分には合わないなってどうしたら思ってもらえるかみたいなのは、よく考えるようにしています。

■シェア街のこれから

―シェア街のこれからの展望について教えてください。

地域との連携は強化していきたいと考えています。
シェア街を始めたのは 2020 年からですが、それからしばらくずっとコロナ禍でした。
コロナ禍までは、ゲストハウスとして使っているこの場所も、町会のお祭りに参加したり、町会の方が飲みに来てくれたりしていましたが、コロナ禍では、そうしたコミュニケーションも一切取れなくなりました。

ようやく昨年ごろから制限も緩和されてリアルのコミュニティも息を吹き返してきたので、これからは地域と協力して何か取り組んでいきたいですね。

■学生に向けて

―私たち iU の学生は、大学でビジネスを学んでいて、将来起業することも視野に入れています。柚木さんの立場から、私たちに何かアドバイスいただけますか。

僕自身はビジネスから入りませんでしたが、でもやっぱり起業するということを考えると、お金を稼ぐということは強く意識すると良いのかなと思います。ただサービスや商品を作るというのは簡単にできますが、売れる商品を作る、魅力的な商品を作る、誰かの問題を解決するようなものを作るというのは難しいです。誰かに必要とされるということは、そこにお金も発生してきますので、その点は深く追求していくと良いのかなと思います。

それと、若干ポジショントークになってしまいますが、僕は地方にすごく可能性を感じています。同じ宿や箱を使ったビジネスでということを考えると、あらゆる面で地方の方が有利かなと思います。地方創成とか地域のために何かやるっていう考え方も、それはそれで良いと思いますが、シンプルにビジネスチャンスとしても地方の方が大きいのかなと思います。

ぜひそういう風に考えてもらって、地域で活躍するプレイヤーの一人になっていただけたら嬉しく思います。

■学生のコメント

柚木

漠然としていたコミュニティの意義について学ぶことができました。
シェア街には、いろんなコミュニティが集まっていて、その分選択肢も沢山ある。もし選択肢の中に自分の関心があるものがなければ作ることができる。シェア街は皆が中心となることができる街であると、取材を通じて感じました。

甲斐

取材前までは、「リアル×オンラインの街」という言葉からは、その実態が全くイメージできていませんでした。
しかし、取材を終えた今では、リアルを超えてオンラインまで、生活や活動を人と共有する空間が目の前に浮かびました。
今回の取材は、街や暮らしの新しい形を発見することができた貴重な機会となりました。

中村

今回の取材を通じて最も印象に残ったことは、柚木さんの「信念の強さ」です。
多くの人は、嫌なことがあると、そこから逃げてしまうことと思います。しかし、柚木さんは、過去の経験から、「逃げるのではなく、変えていく」という信念を抱くようになり、その信念の下、多くの選択をされてきて今に至っています。
私自身、考え方を真似することができるかと言われれば自信はありませんが、少なくとも、自分の中で譲れない軸となるものを探していきたいと思いました。

鶴田

コロナ禍でリアルのコミュニケーションを図る機会が少なくなった中で、オンラインの活用に着眼し、シェア街という事業の一要素に組み込むという発想に驚かされました。
また、私自身、既に起業して事業を実施していますが、最後にアドバイスいただいた「商品は誰でも作れるが、売れる商品を作るのは難しい」という言葉は、本当にそのとおりだと実感しています。
今回の取材をとおして、固定観念にとらわれない考え方の重要性について改めて気づくことができました。

馬淵

柚木さんの幼少期の経験や取材中の「自分がやりたいと思ったことに全直で挑戦できる場所」といった言葉から、シェア街は、誰もが個性を活かすことができる場所であると感じました。
非常に新しい発見ばかりで、シェア街がこれからどんな街になっていくのか楽しみに思います。